

魔王を討伐したので
年上メイドと

辺境で
スローライフします！



アイリーン・ド・ブラック
勇者付のメイドとなった
年上お姉さん。
強い魔力と母性を持つ淑女



大聖女ルシア
勇者パーティを支えた
人類最強の神聖魔法使い。
かつて秘かに勇者ユウキと恋仲であった。



魔王を討伐したので年上メイドと辺境でスローライフします！ のエッチなお話し♡

一卷

弾

同人サークルぶるずあい

表紙・挿絵 弾 (stable diffusion)

目次

アイリさんの破瓜

体験版後書き

22 9

アイリさんの破瓜

今日も美味しいご飯を食べた。僕はほうつと息を吐く。お風呂にも入ったし、歯もしつかり磨いた。

ここで寝たいところなんだけどな……。

寝室では魔法ランプの淡い光が綺麗に洗われたシーツを照らしている。ベッドの硬さは程良い。フロア村特産のラベンダーのアロマオイルがとても良い芳香を放っている。

うーん、僕はうなつて天井を見上げる。今ここにルシアが居たらな……と思った。

サラサラな金髪に小麦色で健康的な肌、豊かな乳房がゆさゆさ揺れて、恐ろしく上手なフェラチオをしてくれる……。そう、僕は三大欲求のひとつ性欲に悩まされていた。

アイリさんも凄く良い身体で、綺麗だよな。アイリさんもラベンダーのいい匂いがするんだよ。僕がこの香りを好きだと言うと、大浴場の湯に布に包まれたラベンダーを入れてくれて、部屋にはアロマオイルを焚いてくれた。

アイリさんの……匂い……。ペニスがムクムクつと起き上がってきた。一人でするの久しぶりだな。裏筋を擦ろうか、それとも皮をシゴこうか。

僕がいざオナニーを始めようとすると、コンコンとドアがノックされた。僕は慌てて寝巻のズボンを上げてから返事をした。

「は、はい、何ですかアイリさん」

「失礼します」

と言つてアイリさんが僕の寝室に入ってきた。

「ユウキさま……何をなされようとしていました？」

「え、いや、別に……」

オナニーしようとしてたとは言えず、僕は口ごもる。

「オナニーしようとしていましたね」

そのものズバリ、アイリさんは斬り込んできた。

「えつと……そのお……」

ああ、僕は今赤面してゐるんだろうな。顔が暑い、は、恥ずかしい。

「性欲は適正に処理しなくては、ユウキさまのストレスになつてしまいます。ユウキさまが正式な伴侶を持たない以上、わたくしにはユウキさまの性欲を処理する義務があります」

「えつと……それって？」

「勇者付きメイドとして当然のお仕事です。ユウキさまはわたくしとセックスするのはお嫌いですか？」

今度は別の意味で赤面してしまふ。

「えつと……その……良いんですか？ そんなこと頼んじやつて」

「もちろんですわ、ユウキさま。わたくしは処女ですので、テクニクなどはまだ拙いかもし

れませんが、メイドとして奉仕も含めた性教育を受けております。ご安心ください」

うわ、爆弾発言だ。アイリさんって処女だったんだ。ルシアと同じで本物の姫さまなんだ。でもアイリさんって三十路じゃなかったっけ？ どんだけ箱入りなんだ？

「ぼ、僕は凄く、アイリさんと、エッチがしたいです」

なんだか僕の言葉は片言になった。

「ありがとうございます。本日の夜伽、精一杯務めさせていただきます」

「よ、よろしくお願いします」

「まずは……お召し物を……と、ユウキさまはすでに勃起なされていたんですね」
僕のズボンにはすでにテントができていて、がっちりと天を突いていた。

「その……アイリさんが凄く綺麗だから」

「お褒め頂き光栄です。それではまずは口で奉仕させていただきます」

「ちよ！ ちよつと待って、アイリさん処女なんですよ？ キスは？」

「もちろん恋人同士がするような接吻の経験はございません」

「そんな、チ○ポにファーストキスしちゃだめですよ」

「はあ……」

アイリさんはよく解らないというような表情をしている。

「まずはちゃんとキスをしよう」

僕がそう言うときアイリさんは目を閉じて、顔を寄せてきた。唇をそつと重ねる。

「んっ……んむ……ぶちゅ……」

うわあ……アイリさんの唇柔らかい。香りは……齒磨き粉のミントの匂いだ。

「んんっ……ぶちゅ……ぶちゅちゅちゅ」

唇をついばむようなキスから、徐々に舌を絡めた濃厚なキスへ移行する。

「んぶちゅ……んんんっ……あむっ……ぶちゅちゅ」

アイリさんの唾液が甘い。処女のアイリさんはこのくらいの刺激でも昂っちゃうんだな。処女なのに盛^{さか}つていて可愛い。

僕はキスをしながら、アイリさんの豊かな乳房を揉んでみた。

「んっ！ あんっ！」

アイリさんがちよつと驚いたような顔をする。しかし嫌がるようなそぶりはせず、僕に身体を預けてきた。

うん、凄いボリュームのおっぱい。揉み応えあるなあ……あつ、乳腺がちよつと硬い。処女なんだなあ……。よし、良く揉みこんで年相応の遊んでるおっぱいに改造しよう。時間はいっぱいあるんだ。アイリさんも良いって言うし、じっくり調教しよう。

「あつ……うんっ……ああああ……おっぱい……気持ち良いですユウキさま♡」

アイリさんが甘い鳴き声をあげた。口を離した二人のあいだに、唾液の銀色の橋ができて、

プツリと切れた。

「よし、ファーストキスはこんなもんか」

「あの……ありがとうございます。一生の記念になりました。わたくしのファーストキス」

「うん、このまま処女喪失もいい思い出しにしておあげるからね」

「よろしく願います。それではユウキさま……お召し物を」

僕は簡素な寝巻きなのであつという間に全裸になったが、アイリさんのメイド服は複雑で、僕もちよつと手こずった。

「あの……ユウキさま、自分で脱げます」

「いやいや、これを脱がすのが楽しいんだって」

スカートとエプロンまでは簡単だった。ドレスの上半身がちよつと複雑で、ちよつと迷うが……うん、これでOKだ。

目の前には白い下着とタイツだけになった。アイリさんがいる。本人はしきりに恥ずかしがっているが、僕は大興奮である。

服の上からでも素晴らしい身体をしているらしいことは容易に想像できたが、脱がしてみたら想像以上だった。

十分巨乳と言えるおっぱい、大きなお尻にキュツとくびれたウエスト、すらりと長い手足に、純白の肌。顔は羞恥しゅうちに上気してほんのり桃色に染まっている。

か……可愛い♪。

「アイリさん、凄く良い身体ですね」

「は、恥ずかしいです……わたくしの身体など粗末なものでしょう。で、……でもオナホの代わりにはなるでしょうか？」

「オナホなんかよりずっと気持ち良さそう」

「そ、そうですか……それではユウキサまの逸物にご奉仕させていただきます」

アイリさんはためらいを一切みせず、僕のペニスに口を付けた。

「あっ……はむっ……じゅぶぶっ……じゅるる……じゅぶ」

「おお……結構上手だね」

「あむっ……ありがとうございます……ユウキサまのメイドになることが決まってから、毎日キュウリで練習いたしておりました」

「そ、そうなんだ」

な、なんだかアイリさんって結構エッチなんだ。正直言うが、僕はエッチなお姉さんが大好きだ。

アイリさんは亀頭を舌で転がしたり、裏筋をなぞるように舐めたり、ちゅつと吸いついたり。処女とは思えぬ技巧をみせた。しかも時々歯を当ててしまったり、喉を使おうとして少しむせてしまったりと、処女らしいミスが微笑ましい。

「じゅぶぶつ……じゅぶちゅ……じゅぶぶぶつ……じゅちゅちゅ……あの、いかがでしょうか？」

「うん、気持ち良いよ」

正直ルシアのスーパーフェラテクに比べると快感は劣るが、三十路まで処女を守ってきたよ
うな、本物の姫が僕の逸物に奉仕しているという状況だけで充分興奮した。

「では……わたくしの身体で……」

「その前にアイリさんのアソコをよく濡らしてほぐさないかね」

「そんな！ いけません！ わたくしの不浄な部分などに触^{さわ}られては」

「全然、凄く綺麗だよ。アイリさんに不浄なところなんてありません」

「は……はうう」

アイリさんが羞恥に顔を真っ赤にして、糸が切れた操り人形のようにしぼむ。

「ささつ、良く見せて」

僕はアイリさんをベッドに押し倒して、下着を脱がして開脚させて見せた。全裸になったアイリさんの肌の輝きが眩しい。うっすらと甘いミルクのような匂いに発酵したチーズのような匂いもする。アイリさんの処女臭だろう。

「おぉ♪」

アイリさんの淡い茂みの下に、白いパンに切れ目を入れ凄く柔らかな生ハムがはみ出したよ

うな、美味しそうなアソコがあった。

「いけません……そんなところ……見ないでえ」

「ダメダメ、よく観察しないとね……それでは、御開帳」

くばあ、と僕は両手の指を使ってアイリさんのアソコを開く。そこはもう濡れていて蜜をたえていた。

アイリさんのオマ○コは穢^{けが}れを知らないヴァージンピンクで、あまり使い込まれていないクリトリスと小さな尿道口、そして環状処女膜に守られた膣口が見えた。

「おお、処女膜可愛い♪」

「あ、あああ……わたくし、見られて……」

アイリさんが羞恥で真っ赤になった。可愛い女性器はいよいよ香り、甘い愛液の香りにツンと香る恥垢の処女臭がする。わずかに納豆臭いのは三十路処女のせいだろう。

「では、いただきます」

僕はパクリとアイリさんの性器に口を付けた。うん、美味い。

滴る愛液は微かに甘く、時々口の中に入ってくる恥垢、ヴァージンチーズは長年の熟成期間を経たパンチの効いた味だ。ちよつと臭いけどそれが良いんだ。

「じゅぶつ……じゅぶぶぶぶつ……じゅるっ……ちゅる」

「あ、あんっ♡ ああああ♡ ユウキさま、なんだか変な感じがします」

「おっ♪ 処女なのにしっかり感じてるね」

「目の前がパチパチして……浮かびあがりそう……変な感じですよ」

「性器から感じる感覚を、素直に受け止めてごらん……じゅぶっ……じゅぶぶぶぶっ」

「ああああ♡……あんっ♡」

アイリさんは目を細め、性器からくる快感をじつくりと味わっていた。

「いいよ。だんだん緊張もとけてきたね。オマ○コも蕩けてきてるよ」

「はっ……はい……やはりユウキさまはお上手なのですね」

「うーん、他人と比較したことないから、上手いかどうかは解らないけど、エッチは好きだったからルシアとよくしたよ」

「ルシアさまと比較すれば格式に美しさも数段劣るメス猫ですが、どうぞオナホだとも思っ
てわたくしの処女をご利用ください」

「何言ってるの、アイリさんも立派な姫さまだよ」

僕はそう言うのと、ペニスに手を添え、アイリさんの膣口へピタリと狙いを定める。体位は正
常位だ。

「じゃあ……いただきます」

「ど……どうぞ」

ぶちぶちぶちっ！ ぶつつ！ ぶつつん！



「ああ……音が♡」

「うん、僕にも聞こえた。破れちゃったねアイリさんの処女膜」

処女膜のところが輪ゴムみたいに締まっていくな。どれどれ……中の方は。

「う、うわっ！ す、凄い！」

「あっ！ ああんっ！ ユ、ユウキさま？」

膣のヒダヒダは熟女だから凄く柔らかく、ネットリと粘りついてくるんだけど、膣の中は2.5センチほどの完全な処女、圧倒的に狭い。一般的な非処女は3センチ以上つてところ。しかし、この喰いつくような締まりは2.2センチ程度のところに僕の逸物をねじ込んでいる感じがする。

まさに三十路まで処女を守った女の子のみが一晩だけなれる。魔法の名器だった。

「ああ……凄いです。ユウキさまが入っているのがはつきり分かります。熱くて硬くて……素敵です」

「アイリさんのココ、凄く気持ち良くて想像以上過ぎて、最高です」

「まあ……まあ……嬉しいです。どうぞご満足するまで、わたくしの処女をご利用ください」
くつつちゃ……くつつちゃ……くちゅくちゅ……。

アイリさんの膣からは上品な姫鳴りがする。女体の鎖骨や額にはうつつすらと汗が浮かんでいる。その汗の匂いがミルクみたいで、僕はうっとりした。

これは一生の記念になる素晴らしいセックスだ。三十路で処女、その上震えがくるような名器持ちの美女なんて滅多に出会えるものではない。

くっちやくっちや……ぱん、ぱん……くっちゆくっちゅ……ぱん、ぱん、ぱん。

アイリさんのアソコが次第に僕のに馴染んでいくのに合わせて、少しずつ挿入の速度を上げていく。

「あんっ♡ ああああん♡ あふんっ♡」

「凄……馴染んできてもネットリトロトロ絡んできて……締めまりも凄く良い」

「あっ♡ ありがとうございます♡」

アイリさんも腰の位置を僕に合わせて調節してきたり、微妙に腰を使つて挿入を助けたりしてくれた。か……可愛いなあ。

そうこうしていると、前立腺からマグマが這いあがってくる感覚がした。

「ごめん、アイリさん……僕、イキそうだ」

「は、はい♡ わたくしもイキそうです♡ 今日は完璧に計算しております。避妊は必要ないので♡ どうぞそのままわたくしの子宮の処女も頂いてください♡」

「う、うん。……な、中に出すよ……で、出る！」

どびゅうつ！ どびゅびゅびゅびゅつ！ びゅー！ びゅびゅー！

「ああああ……解ります♡ ユウキサマの精液が、わたくしの子宮口を貫通されて♡」

アイリさんも僕の射精に合わせて、ビクリビクリと体を痙攣させながら、絶頂する。

絶頂する度に僕のソコに吸いついてきゅきゅつと締めまり、射精を促す。アイリさんのテクニクじゃない。これはメスの本能だ。

「はあ……はあ……はあ……ありがとうございます♡ 本当に素敵な処女喪失でした♡ ユウ

キさまに処女を捧げられて、わたくしは幸せものです」

アイリさんは瞳ウルウルで、ちよつと泣きそうになっていた。僕に中出しされたのがそんなに嬉しいのか……やっぱ可愛い♪。

アイリさんが大きく息を吐き、眼を閉じた。快感の余韻に浸っているようだ。

ペニスを抜くとコポリと音を立てて、僕の中出した精液が膣口からこぼれた。

ぐくりと僕の喉がなる。エ……エロいなホント。

ムクムクつと僕の逸物がまた大きくなった。

「ああ……ユウキさまはまだご満足いただけていないのですか？」

「その……アイリさんがエッチで可愛くて」

「まあ嬉しいです。こんな粗末な蜜壺でよろしければ、ご自由にお使いになって下さい」

その後僕は五回ほどアイリさんに膣内射精をした。さすがにここまでやると、名器の魔法は解けてしまった。

でも膣が緩くなっても十分名器なことに僕は感謝した。
スローライフに気持ち良いセックス。こんな幸せな日々がこれから続くんだよな。うゝん、最高だ！

体験版後書き

この度は同人サークルぶるずあいの作品をお読みいただき、誠にありがとうございました。
今作は連載ライトノベル『魔王を討伐したので年上メイドと辺境でスローライフします！』のエッチシーンのみを抜粋した同人誌の体験版になります。同人誌の方ではアイリさんの受精とルシアの破瓜、魔王戦前夜のルシアとのエッチを収録しています。宜しければ同人サークルぶるずあい作品取り扱いサイトの方から、ご購入いただければと思います。

ライトノベルのほうは、小説家になろう、およびアルファポリスで連載をしています。

以前から自分は面白いポルノを書くことを目指して、既存のエロ小説はストーリーが面白くない。一般向けのライトノベルはセックスシーンがないので物足りないという人向けに書き下ろした作品です。

今後もう言ったストーリーのあるエロライトノベルの他、エロに特化した短編なんかも書いてみようかと思っています。

緩いペースでぼちぼちコツコツと作品を書いていきます。よろしかったらまた次の作品でお

目にかかりましょう。

同人サークルぶるずあいのホームページでは、無料で読めるエツチな過去作が沢山ありますので、今回初めましての方や久しくホームページに行っていないという方もよろしかったら、遊びに来てください。

それではまた。

魔王を討伐したので年上メイドと辺境でスローライフします！ のエッチなお話し♡

一巻

2024年10月16日 初版

奥 付

発行 同人サークルぶるずあい

著者 弾

URL <https://bulls-ai.just-size.net/>

E-Mail writer@sample.org

イラスト 弾 (stable diffusion)

URL <http://illustrator.sample.org/>

E-Mail illustrator@sample.org



本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(<https://sss.sylphid.jp/>)